
にゃんとも寒い日の出来事

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にゃんとも寒い日の出来事

【NZコード】

N5392D

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

ニヤン次郎とニヤン太と人間の、にゃんとも寒い日の出来事。

空にあんにやに真つ赤にや太陽が浮かんでいるのこ、何故全然暖かくにやいんだらう? 何故こんにやに寒いんだらう? 今日せにやんとも寒いにや、ブルブルです。

オイラは寒いのが苦手、だからこりゃねべくの土管から出にやいようにしている。でもお腹は空くにや、お腹がべーべー鳴つてウルサイにや、誰か親切にや猫がお匂い飯を持つてくれにやいかにやー。

「いや、友達のニヤン太がお魚さんを持ちてくれたにや。

「ニヤン次郎、お匂い飯だ。カレイだ」「あつがとにや、ニヤン太は優しいにや」

寒空の下、土管のにやかでオイラはお魚さんに躊躇付いた。ニヤン太はお魚さんに躊躇付かずぽーっとしてこる、ビリしたんだらう元氣にやいにや。

「ニヤン太、悩み事でもあるこや?」「えつ、何でわかつた?」「だつてお魚さん食べてこいしそーっとしてこるにや、そりやわかるにや」「さうか、俺ぼーっとしたか……」

ニヤン太元氣にやいにや、オイラはお友達だし相談に乗るにや。その前にこの美味しいカレイさんを食べるにや、残すと勿体にやいし骨まで食べるにや!

「そのカレイあげるよ、俺はこりないかい」

そう言つて二ヤン太は土管から出で、寒い外へと行つてしまつた。オイラはあと半分残つてゐるカレイと一匹のカレイをヨダレを垂らしにやがら見た、しかし顔を左右に振つたあと風がビュンビュン吹いている外へと出た。二ヤン太は友達だもん、放つておけにやいよ。

「待つて！ 二ヤン太待つて！ オイラに話してよ、にやにがあつたのか」

「二ヤン次郎……」

チリンと首に付いてゐる鈴を鳴らし、二ヤン太がオイラの方に歩いてくる。にやにや、話してくれるんだ！ そうにやんだ！
ニヤン太はオイラの田の前に来て、目を細めてじーっと見てきた。
にや、にやにか顔に付いてるにや？ 朝はちゃんと水で顔を洗つた
にや、冷たかつたけど我慢したにや。

「二ヤン次郎、お前

「友達だから放つておけにやいにや！ 友のピンチは友がお助けしにやいと！」

「……ああ、ありがと。そのまま動かないでね」

にやんか予想外にや！ オイラが想像していたのは、二ヤン太がとびつきりの笑顔ににやる事にや。心配してくれてありがとう、お前は良い友だ つてなるかにやと思ったのに、実際はリアクション低いにや。しかも動かないでつて、超気ににやるにや。

「迷惑にや？ 友のお助けはいらにやいにや？」

「いるよ、全然迷惑じやないよ」

「だったらにんでリアクション低いにや？」

「頭に乗つてるよ、僕達の大好物が」

空き缶が「ロロロロ」転がってオイラに当たつた。「いや？」大好物が乗ってる？

頭を振つてみた、そしたらネズミが地面に落ちた。何故今まで気付かにやかつたんだろう？ オイラ、猫の大好物であるネズミに！ 寒くて気付かなかつたのか、ニヤン太を心配していて気付かなかつたのか、この二つだとしたら後者が良いにや。

チュー・チュー鳴いてちっさくてすばしっこくて美味しいネズミ、ひょっとしてこのネズミも寒いの苦手で土管にいたのかな。

そうか、ニヤン太はこのネズミを狙つていたのか！ だから動かないでつて言つたのかー。

「魚も美味しいけどネズミも美味しいよ」「いや

「そうだね、でも俺はいらないよ

その時ネズミは逃げるため走りました、しかしオイラの猫パンチをくらいい氣絶しました。ニヤン太は手が震えていました、寒いのかにや。

「それを持って土管に戻ろつか、お腹すいたし」「いやん！」

素直じゃにゃいにゃ、お腹が空いてたにゃう言つてくれれば良いのに。

オイラとニヤン太は、風を多少は凌げる土管に入った。残した力レイはそのままだった。

「食べよつか、食べおわつたら話を聞いてくれ」「わかったにゃー！」

「お腹につけました」飯を食べた、黙々と食べた。

カレイさんありがとうございます。貴方のおかげでオイラは生きています。
生きとし生けるもの、今日も精一杯生きましょ。」

「お腹につけました」元にがあつたのか教えてほしいに
や

「うん、教えるよ」

その時ぽたぽた、とこづ音が聞こえてきた。雨が降ってきたんだ、
雨は冷たいから嫌だにゃー。

「ケント君とアヤノちゃんがケンカしてて、胸が痛くてあの家に
はもう帰りたくないんだ」

「……」

「それに俺は飼い猫じゃん、お前と違つて良い思いしてるのは
情けなくて。野良のお前は格好良い、たくましく、一人で何でもで
きる」

「ニヤン太、何言つてるにゃー」

「俺は人間に飼われてるから雨風の心配をしなくても、食事の心配
をしなくても良い。でもお前は毎日精一杯に生きている、俺は精一
杯に生きていない。飼い猫なんて負け猫だ」

ケンカで居場所がにゅくにゅくって色々考えてしまつたんだ、そし
て自由気ままに生きている野良猫に嫉妬してゐるんだ。まずは落ち着
かせにやること、深呼吸でもやれいやいと。

「落ち着こつよ」

「落ち着いてるよ、俺は平常心だ！」

「今頃ニヤン太をさがしてると思つから家に帰る」

「さがしてなんかない、俺はこらなんだ！ 俺のせいにケンカに

なつたんだ！」

「ヤン太は走つていつた、雨が降りしきる中を。オイラは走つて
いつた方を見て涙を流した。

「ヤン太の馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿！」

オイラは涙を流しにやがら走つた、雨は嫌だけど今はそんにやの
関係にやい。友をお助けるんだ、大好きにやヤン太をお助けする
んだ。

「ヤン太！ ヤン太何処！ 返事してよー」

叫んだ、人間が何かしらとオイラを見ても、人込みの中でも、雨
に打たれにやがら、お助けするために叫んだ。

走つた、叫ぶのと同じぐらい。もう足が棒のようにやつていて、
これ以上は走れにやい。「メンねヤン太お助けできにやいや、こ
んなオイラは友達失格だよね。

「ヤン次郎？ 君ヤン次郎だよね？」

その時声が聞こえた。そこにいたのは、傘をさしていて涙田にに
やつているアヤノちゃんだ。

「ごめんね、私達がケンカしたから君にまで迷惑をかけて」

ひょいと持ち上げられ傘の中で抱き締められた。にや、にやかれ
ても困るにや！ 抱き締められたら照れるにや！

「ヤン太がケンカなんかやめてって言つてくれたの、ケンカなん

かしても意味ないって言つてくれたの」

「そして、俺には大好きなお友達がいる、ニヤン次郎といつ最高のダチがいるって教えてくれたんだ」

ケント君だ、アヤノちゃんと同じように涙目だ。にやかにやいで！ オイラにやみだには弱いんだ、もらい泣きつてヤツしちゃうんだ。

「心で伝えたんだ、ケントとアヤノに」

ニヤン太はケント君に抱き締められながら言つた、その表情は笑顔だ。

仲直りしたんだ、良かつたねニヤン太。オイラの事を最高のダチつて言つてくれたんだ、ありがとう。

「いつでもお家に遊びに来て良いからね」

アヤノちゃんが笑顔で言つた。

「一緒に遊ぼうぜ」

ケント君が言つた。

「さつきはネズミを捕獲できなかつたから、今度ネズミの捕獲の仕方を一から教えてくれよな」

ニヤン太が言つた。

「みんなやありがとう、オイラは幸せにや」

ニヤン次郎が言った。

今日はにやんとも寒い日だったけど、とってもあつかい事があつたから風邪の心配はしにやくても良いにや。

(後書き)

○○ひも、と猫語(?)で読みにくかったらスミマセンでした()
——()

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5392d/>

にゃんとも寒い日の出来事

2010年12月30日20時28分発行